

～「千の風になったあなたへ贈る手紙」作品原書受託記念～

## 「千の風物語」シンポジウム・朗読会



平成 22 年 6 月 27 日（日）、西条市・（財）自治総合センター主催の下、第 1 回「千の風物語 シンポジウム・朗読会」を開催いたしました。

この催しは、昨年、名曲「千の風になって」に因み、亡き大切な人へ贈る手紙として全国募集された「千の風になったあなたへ贈る手紙」（株朝日新聞社・株朝日新聞出版共催）の作品原書の西条市への寄託を記念して、開催したものです。

この「千の風になったあなたへ贈る手紙」募集には、世界 17 か国から 5,000 通を超える応募があり、その作品の一部をまとめた作品集も発刊される等、大きな反響を呼びました。



★作品集「千の風になったあなたへ贈る手紙」

---

---

## 《作品原書 寄託贈呈式》



(寄託を受けた 5000 通以上もの作品原書)



---

---

作品の朗読～紹介に先立ち、作品原書の寄託贈呈式が行われました。

この「千の風になったあなたへ贈る手紙」の作品原書寄託については、募集事業の主催者である(株)朝日新聞社様から、この大切な手紙の作品の数々を、この取り組みの発端ともなった「千の風になって」ゆかりのまち西条で、末永く愛し、保管していただくというご好意の下、実現したものです。

当日は、(株)朝日新聞社室田お客様本部長様から西条市長に目録の贈呈が行われました。

この作品原書は、平成 21 年 6 月 1 日にオープンした西条図書館にて大切に保管されます。

## 「千の風になったあなたへ贈る手紙」 作品紹介～朗読

「千の風物語」では、作品集「千の風になったあなたへ贈る手紙」（朝日新聞出版）に収められている作品の中から、厳選 10 作品を新井 満さんや一色 清さん、そしてオーディションにより選ばれた一般朗読者の方々に朗読披露していただきました。

一般朗読者 永井 信子さん（松山市在住） 朗読

～「千の風を育てたまち 西条市賞」～

「あかねの花火」



あかねは花火と西瓜（すいか）が大好きだった私の娘。

あの夏、豊橋祇園祭りの花火を、病院の屋上から友人と見るのを楽しみにしていた。が、生憎その日は朝から容態が悪化し、花火どころではなく、辛くて長い夜となってしまった。

それから間もなくあかねは旅立った。二十三歳。花火は見られないままに。十年が過ぎた頃、定額貯金の満期通知が毎月届くようになった。厳しく貯金させた日が思い出され後悔の涙が流れた。このお金はあかねが喜ぶことに使いたいと思った。

「お母さんのお楽しみに使ってよ。親孝行してるみたいで鼻が高いじゃん」  
照れながらいうあかねの顔が浮かぶ。

豊橋祇園祭り奉納花火協賛者募集を知り「これだ」と飛びついた。でも一発何万円もするという花火代には戸惑った。

あの日、花火が見たいと泣いていた姿が私に決心を促した。あかねは「もっ  
たいたいよ」というだろうが、貯金で十分に足りる。

「良いことに気がついたね。絶対喜ぶよ」

長女も大賛成してくれた。

花火大会当日は栈敷席に招待された。

「二十七番 前田あかねさん追善供養」

とアナウンスされ、夜空いっぱいにあかねの花火が広がった。

あかねが見ていてくれますようにと祈る。お父さんも一緒に見て下さいと祈る。

「見て、見て！私の花火だよ」

興奮のあまり、だれかれ構わず肩をたたいて歓喜の声を上げ、輝くような笑顔を振りまいているあかねが容易に想像できた。

「良かった！これで良かったんだ」

いつまでも消えない笑顔に私は癒された。

「いつでも傍にいるからね」

あかねと私の合言葉を千の風が聞いていた。

(朗読者 永井さんのお話)

私は名水のたっぴり流れているこの西条の街が大好きで、亡くなった人への深い想いが伝えられたらという思いで、この朗読会に応募しました。

私は作者の前田さんと同じ世代で、やはり私も娘を持っているものですから、逆縁の立場に立たされた母親の悲しみとかつらさも大変共感できる場所があります。前田さんには、悲しみを乗り越え、これからも娘さんの分まで明るく元気で生きてほしい、そして同じ時代を生きる私も元気に前向きに頑張りたい。そう、思っています。

一般朗読者 真鍋 明紀子さん（西条市） 朗読

～岸 恵子賞～

「紙飛行機」



「ひろ君、ほら 紙飛行機とばしに中央公園に行こう。夏休みだから稲田君も遊びに来るよ。お昼も過ぎたよ 起きよう。」

浩隆の小さな手は 私の手の中で温かく、細い指先には数日前まで紙飛行機の翼を塗っていた青色が かすかに残っていた。

「ママも先生（医師）も心配しないで、僕 大丈夫だから」

と おとといの昼震える手で薬を飲み、夜になって痙攣を起こし、それからベッドに横になったままだった。小学校一年生の時白血病になった浩隆は三年生の夏に骨髄移植をし、四年生になる春に再発して六年生の今まで治療が続いていた。外泊できると中央公園の原っぱに行き、高い空に紙飛行機をとばし、青い空に光る白い機影をみあげていた。

「ひろ君・・・。」

その小さな手は、五重の塔や電気のしくみの本を読んで ベッドの上で描いていた未来都市の夢を 私に伝えていた。

そして そのぬくもりは もうすぐ遠くへ行く浩隆のさよならだった。

やがて

夏の終わりの夕陽が病室の窓を染め、

金色の光が浩隆の茶色く透明な瞳に届くと、浩隆は窓を抜け、夕焼けの空へ駆けていった。

私は夕闇に沈む病室で浩隆の瞳を閉じた。

私の中に残った小さな灯りは

春の日 原っぱの土手で友達と草すべりをする浩隆の輝く笑顔を映している。

そして 病気の子供達の描いた夢をいつか叶えたくて

私は 夕焼けの海に見える小さな町の小児科医院で働いている。

(朗読者 真鍋さんのコメント)

私にも子どもがおりますので、この作品を読ませていただきまして、涙が溢れました。お母さんの子どもを思う気持ち、とてもよくわかります。とても切なく哀しい気持ち、だけど前を向いて歩いていく、そういうお母さんの真摯な生き方に大変胸を打たれました。

私は近年、妹と親友という大切な人の死に直面し、人は必ず死ぬという現実を受け止めなければなりませんでした。とても悲しい現実ですが、その一方で一人一人の人生に敬意を払い、その命の終わりが美しく、尊いものでありますようにと祈りたいと思いました。

そして、今日の朗読会に参加して、改めて人は死んでも私たちの心の中で永遠に生き続けている、そして「千の風」になって、思い出の場所や大切な人のところに旅を続け、時には私のところにも帰ってきてくれる、そう信じる心が一層強くなり、元気が出ました。何か大切なあの人を一層好きになれたような気がします。

一般朗読者 福田 雅代さん（西条市） 朗読

～さだまさし賞～

「生きているだけで百点満点」



乳がんでお前が亡くなってから、四度目の冬が近づいている。

独りで観る四季折々の風景は、いつも見たことがない気がする。そして目に滲みる。

とりわけ今年の秋の、松雲山荘の鮮やかな紅葉は見事で、その彩りはなぜかとても、堪えた。時がたてば忘れていくことと、想いが増していくことがある。

男は生きるのが不器用だから、やっぱり女房よりも先に逝くべきだと思うよ。よく喧嘩をしたな。そして何故、お前のような女と一緒にになったのかと思ったものだった。神は非情だ。お前が生きている時は、どんなに俺にとってお前が、必要であるかを気づかせてはくれなかった。

不意に、お前の友人たちと顔を逢わせることがある。彼女たちは頼みもしないのに、お前との思い出話を始め、そして去って行く。

望まないのに、寂しさを詰めていた箱が開いてしまい、それを閉じるには、しばらく時間がかかる。

助産師であったお前は、多くの新生児を取り上げた体験をもとに、小、中学校の生徒達に、命の誕生までの道のりと、その大切さについて講演をしていたが、講演を聴いた生徒達の感想文集を見つけた。そしてお前が生徒たちに残したという言葉を知ったよ。

「生きているだけで百点満点」

その言葉に勇気を持った生徒が多くいた。

お前に頼みたい。どうか千の風になって、残された俺や、まだ独り立ちしたとは言えない我が家の、三人の子供たちの耳元に立ち寄り、励まして欲しい。そして言って欲しい。

「生きているだけで百点満点」と。

(朗読者 福田さんのコメント)

私は普段、おくやみに携わる仕事をしています。ですから、大切な方を亡くした方々に、少しでも勇気が出る言葉を贈りたい、そして心を癒してあげられる言葉を贈ってあげたいということをいつも思っています。そのヒントにこの朗読会になるんじゃないかなと思って、応募させていただきました。

作者の岸さんのぽつぽつと呟くような言葉の中に、ギューっと凝縮した想いが詰まっているので、どれだけそれを表現できたか不安ですが、この作品を読ませていただいて、とても幸せでした。

「生きているだけで百点満点！」

未来の子ども達にも伝えていきたい素晴らしい言葉です。



一般朗読者 黒川 敦子さん（西条市） 朗読

～俵 万智賞～

「親愛なるいそちゃんへ」



「親愛なるちいちゃんへ」の書き出しで、生前あなたは私にラブレターをくれました。今度は私からです。秋になり、里山は彼岸花が色づきを加えてキンモクセイが香りを運んできます。農作業が忙しかった夏が終わりました。あなたからは、慌しい私たちが見えていましたか？日中暑かった夏の日の夕方、西の畑に夕陽を見に行くとさわやかな風に包まれます。畑が大好きだったあなたは日が暮れるまで畑にいて「ごはんよー」って呼びに行くと「おう！」ってにこにこ戻ってきましたね。今でも畑に行くと「おう！」って出てきそうです。

結婚して長男、次男が生まれ、二人ともに知的な遅れがわかったとき、私たちはとても落ち込みました。障がい児を育てる大変さで暗くなっていく私を見て、あなたは考えた末に「二人とも体は丈夫そうだから、将来は畑仕事を一緒にするのはどうだろう。早めにその基礎を作るために脱サラして新規就農しようと思う」と言いました。私は「いいねえ」と即答し、それからあなたは無農薬・無化学肥料での野菜作りを一から築き上げました。

そんな中で娘を授かったとき、あなたは本当にうれしそうでしたね。一通りの野菜が作れるようになり、やっと軌道に乗ってきたと思った矢先、あなたは余命三か月の病に倒れました。どうしようと落ち込む私に「俺は大丈夫、死ぬ気がしないから。克服してみせる」と、抗がん剤の道を選ばず、玄米菜食、民間療法とあらゆる努力をして二年半、最後まで「生きたい。何とかしたい」と頑張ってくれました。私が落ち込んでいるときに助けてくれたのはいつもあなたでした。本当にありがとう。

私たち家族は・・・・・・大丈夫です。農業を続け、この土地で普通に生活しています。夕食時、畑でとれた野菜を料理して食卓を囲み、おいしいなあと感じながら、一日の出来事を話しあい、笑い、今日も一日過ぎたなあと思う。毎日のこの繰り返しができるれば十分幸せと思えるようになったんだよ。子供たちも、毎日元気に学校に通っています。今の子供たちをあなたが見ると「久しぶりだなあ、ほんとに成長したなあ」と喜んでくれるでしょうね。その言葉を聞きたいです。聞けることなら。いつの日か私の中ではっきりとその声を聞ける日がくるまで、私は足を止めず、でもぼちぼちとできる範囲でそしてしっかりと前に進んでいきたいと思っています。見守っていてください。よろしくね。

（朗読者 黒川さんのコメント）

私はこの10年程の間に両親と兄を亡くしております。愛する人を亡くした時というのは本当に悲しいのですけれども、でもそんなにつらいからといってその人と出会わず、一緒に過ごさなければ良かったかというところではなくって、愛された思い出、慈しみあった思い出というのは本当に一生の宝物として、胸の中であって、いつも私の心を照らし、支えてくれているんですね。

この「千の風になったあなたへ贈る手紙」というのは、亡くなった方への手紙で、亡くなった方に対する感謝の心に満ち溢れているのですね。そこにとても共感し、多くの皆様にこの作品をご紹介したく、応募させて頂きました。

この作品「親愛なるいそちゃんへ」は、ご主人に頼っていたかわいい奥さんであったちーちゃんが、ご主人を亡くされてから大変な状況の中、毎日の小さな出来事に幸せを見出して、しっかりと自立していくという姿がとてもわかり易く描かれて、そのとっても眩しくてけな気な姿に、涙を流さずに読むようにするのが大変でした。

とっても心温まる素敵な手紙です。

Special Guest 一色 清 さん 朗読

～朝日新聞社賞～

「千の言の葉」



十一月、私の五十八歳の誕生日に雪が降りました。その二日後があなたの十五回目の命日。

十五年前、がんで逝ったあなたが、家族に残した手紙に、『必ずみんなのそばにいて守っているから』と書いてありましたね。

「四人もいるのにどうやって？」

「分身の術でも使うのか！」

「お父さんがいいかげんなんだから・・・」

と、みんなで笑い合いましたっけ。

『明るく明るくね。お父さんがいなくてもいるかのように暮らしていくんだよ』とも書いてありましたね。はいはい、そのように生きてきましたとも。

子供たちは、十六、十四、十二歳の年令で父親の、がんと壮絶な闘いと死を見ました。目の前に刃をつきつけられるごとく、人生の不条理を見ました。そろってのんびり気弱な彼らでしたが、その後何度かの自らの転機に際しては、断じて逃げない姿勢を見せ、私を驚かせたのです。

あなたは子供たちへのたくさんの手紙を、私に託していきました。成人までの誕生日毎のバースデーカード。結婚する時のお祝いの手紙。一通ずつ渡すたびに、彼らは照れくさそうに嬉しげに受けとり、必ず一人でひっそりと読んでいたものでした。

私たち四人、平穏順調にこの十五年を生きてきた訳ではないこと、知っていますよね。悲しみの大波を受けた後だから、その後の中波小波をやり過ごせたのかなとも思うけれど、それでもそれぞれのがんばりは、ほめてやって下さいね。子供たちと、ついでに私のことも。

千の言の葉で、子供たちを導き守ってくれてありがとう。千の言の葉で、私たちを幸せにしてくれてありがとう。

今日も雪がちらついています。寒がりのお父さん、天国で暖かくしていますか。

一般朗読者 西原 淑子さん（西条市） 朗読

～「千の風のふるさと」新潟市賞～

### 「私の宝」



信恵へ

今年の冬は例年より寒い気がします。でも、お母さんの心は今とても温かいですよ。そのことを、あなたに伝えたくて手紙を書くことにしました。本当は会って話したいのだけれど 二十八歳の若さで私より先に逝ってしまうのも。

あの時は、癌と精一杯闘っているあなたがかわいそうで替われるものならお母さんの命と替わってあげたかったわ。

親として何もできない無力さや悲しさ、悔しい気持ちで一杯でした。でも、お母さん以上に親としての無力さを感じたのはあなたでしょうね。あなたが「私の宝」と言っていた二歳の優里を置いて逝くことは、辛いとか悲しいとかでは言い尽くすことができないほど悔やまれ、何より優里のことが気掛かりだったでしょうね。

でもね、安心しなさい。優里は今年成人式を迎え、あなたが着た振袖を着てくれましたよ。その姿は、あなたが帰ってきたのかと錯覚を起こすぐらい、そして口調や仕草までそっくりで、まさに生き写しです。

先日ね、優里と会ったときに何気なくこう言ったのよ。「おばあちゃんももう今年八十歳になって、一人暮らしだと不安だから施設とか老人ホームにでも行かないといけないかもね」って。そうしたら夜に、優里から電話があって、「おばあちゃん、私の家に三人で暮らそうよ、パパもいって言っているから」ですって。

あなたの旦那さんと孫の優しさに涙がでて、とても温かい気持ちになりましたよ。

思いやりのあるところもあなたにそっくりですね。あなたが親より先に逝ってしまった親不孝をあなたの娘はその分おばあちゃん孝行してくれています。

だからまだ、あなたのところにいくわけにはいきません。優里の優しさに触れるたびにまだまだ頑張ろうっていう気持ちになります。

そして、一分でも一秒でも長く、あなたの分まで優里を見守っていたいからね。

あなたは、すばらしい「宝」をお母さんに残してくれました。ありがとうね。信恵、あなたも私の「宝」だよ。

母より

(朗読者 西原さんのコメント)

ある日、美容室に行って、椅子に座って、鏡の前に座ったら、鏡の横にこの朗読会のチラシが貼ってありました。私は何故かそのチラシが気になり、あとはまるで「千の風」にのったみたいにそのチラシを持ち帰り、その日に自宅で朗読のテープを吹き込んで、応募しました。

私の亡くなった父は、合唱団の指揮をいたしておりまして、今日は天国の千人の合唱団と一緒にここに聞きにきてくれているんじゃないかなって思っています。

「私の宝」。

作者の方は、まだお若いときに娘さんを亡くされて、それからずっと固い石のような冷たいものを抱き続けていたと思うんですけど、お孫さんの「いっしょに暮らそう、おばあちゃん」の一言に、溶けるようにあたたかい気持ちになられたのではないかと思います。

読んでいて、それだけで胸が一杯になりました。

とても心温まる素敵な手紙でした。

一般朗読者 岩本 明音さん（西条市） 朗読  
～名曲「千の風になって誕生の地」七飯町賞～

「大好きなお兄ちゃまへ」



お兄ちゃまがなくなって四年たちました。  
お兄ちゃまとの思い出は、たくさんあります。  
まずはダブルシッコです。  
ダブルシッコとは、二人でならんでトイレをすることです。  
またおにごっこもしました。だいこうぶつもいっしょでからあげでした。  
それにサッカーもできるし、べんきょうもできるやさしいお兄ちゃまでした。  
お兄ちゃまがサッカーをしているすがたをもっともっと見たかったです。  
ある日とつぜんスキーに行っていたお兄ちゃまが、たおれたというれんらく  
を聞き、すぐにぼくは、びょういんにかけつけました。  
するとお兄ちゃまはベッドでねていました。  
そしてお兄ちゃまは、天にのぼっていったのでした。

ぼくは、そのことが今でもずっと心にのこっています。  
今でも時どきなみだをながしてしまいます。  
お兄ちゃまのサッカーをしているすがたを見たりからあげをいっしょに食べたいのです。  
でも、本とうにお兄ちゃまに会えたらいいなと思います。  
でもぼくには見えないどこかで、ぼくのことを見まもってくれていると思います。  
いつかお兄ちゃまに会えるとしんじつづけます。  
会える時まで、ぼくはお兄ちゃまの分までいっしょうけんめい生きています。

(朗読者 岩本さんのコメント)

私は「千の風になって」の詩を初めて聞いた時、亡くなった方からのとても温かなメッセージのように感じました。この詩を聞いたたくさんの人が、安心したり、大きな希望を持つことができたのではないかと思います。

私もこの「千の風」にちなみ、この朗読会に参加することで、多くの人に少しでもやさしい風を吹かせたいなって思って、応募いたしました。

そして、今日は、妊娠9か月で亡くなった私の大切な娘にもその風が届くことを願って朗読させていただきたいと思っています。

「大好きなお兄ちゃまへ」

この作品は、亡くなったお兄ちゃんへの手紙として、弟のりょうくんがストレートにその想いを手紙に書いたものですが、読めば読むほど二人で仲良く遊んでいた情景が目に見え、とても切ない気持ちになります。

でも、大好きなお兄ちゃんのことを心に思いながらも、いっしょうけんめい今、そして未来を生きるというりょうくんのその力強い気持ちに、大変私も勇気づけられました。

今日は、この小さな手紙に込められたりょうくんの大きな想いが、天国のお兄ちゃままで届くようにと、私も元気に読ませていただきました。

今日は、この手紙を読ませていただけて、とても幸せな気持ちでいっぱいです。



一般朗読者 吉田 玉水さん（西条市） 朗読

～「千の風を育てたまち西条市賞」～

「水子」



「ごめんな生きさせてあげられへんくて。」

あんたが空へ向って、はや一年。わたしは、いまだに、空を見れへんわ。空から、あんたが、まばたきもせず、がっちし見ているんちゃうかと思うと。怖く見れへん。自分がしたこと、まだちゃんと落とし前つけられへん。胸はって生きることは、正直しんどい。黙ってんのは、しんどいねん。だけど、あんたは、わたしに生きろというやろ。

興味本位で彼と出会って、セックスした。愛？好き？それがどうゆう心情かは関係なかった。分からぬままに体をゆだね、分からぬままに、あんたが出来た。あんたが出来た。まるで飼い猫のハナが外で子供作ってきたみたいに、わたしも妊娠してしもた。金もないくせに、結婚しようと言われた。家族？なんやそれ。家族って、こんな簡単に作れるんや。わたしは混乱した。あんたを腹に入れたまま、時は過ぎ、両親が会議した。現実は甘なかったわ。ちゃんちゃんばらばら大慌て。そうと決まれば病院予約。かなり大きくなっているから、どう

とかこうとか。

痛かったなあ。あれが、あんたの唯一残した生の証。いまだに痛みが体に記憶されている。わたしは、ばか野郎やけど、生きる必要がある。世間のばか野郎に教えてやらなアカン。この痛みを、そして痛みを背負って歩く辛さを。勇気を出して、ペンをとった。これを書いた。窓から澄んだ空が見えてるわ。太陽がサンサンと照っている。どや、そっちの世界は。

きれいなブルーやなあ。空が光ってるで。ああ、こんなに空は広がったんかあ。あんたがどこにいるかも分かれへんな。くそ、涙が用紙濡らしてしもた。大事な大事な原稿や。あんたのために書いた。これがわたしの謝罪。

「ごめんな生きさせてあげられへんくて。」

(朗読者 吉田さんのコメント)

私も女性の一人として、非常に読むのが大変な作品でした。

正直私がこの作品を読ませていただいていた方がいいのだろうか？という思いもありましたが、今日この場で読ませていただくにあたり、作者の方のこの一つ一つの言葉と、その言葉に秘められたたくさんの色々な想いを探しながら、少しでもその想いを伝え、表現できたらという思いで臨みました。

作者の方は、心の中にある罪悪感やそのわだかまりを、この「千の風になったあなたへ贈る手紙」に託して、天国にいるわが子へのメッセージとして届けることで、心の整理とこれから生きていく決意をつたえたかったのだと思います。

非常に心にしみいる作品でした。作者の方のこれからを応援したいです。

一般朗読者 土田 みかりさん（東京都在住） 朗読

～「千の風を育てたまち西条市賞」～

「極楽のとんぼへ」



検査入院で入った病院のベッドで、あなたは逝く前の夜に私に「さやかを頼む。けん、頑張れと。」と言いました。そして、帰る私に左手を高く挙げて、驚くほど大きな声で「さよならあ。」と叫びました。翌日、容体が急変して、もう話すこともできず逝きました。高校入学直後の娘が十五歳。六年生の息子が十一歳。

あなたはそれから見ていましたか。あなたの息子は隠れて何回も泣いていました。あなたの娘はしばらく何も話しませんでした。家族三人、それぞれ駅までの道を病院を避けて通っていました。何回も春が来たけれど、あの日の風に舞い散る桜を思って、桜を見ることができませんでした。

十六年が経ちました。来春は十七回忌です。

あなたが逝ってしばらくして、我が家にかわいい犬が来ました。犬好きのあ

あなたが生きている間に、飼ってあげればよかったです。私達はその犬を愛し、家族にしました。息子の運転での墓参に、いつも同行するかわいい子です。その犬もすでに老犬。

十六年は、長い時間でした。

今年私は、六十歳の定年を迎えましたよ。

子ども達は、ずっと私に優しいです。あなたが心を残して私に託した子ども達が、私を支えてくれました。

明るく、ひょうきんで、前向きだった「極楽とんぼ」のあなた、私を待っていますか。でも私はまだまだあなたのところには行きません。

今、幸せです。去年の命日、風に桜の花が溢れ満ちて、「がんばったなあ。」というあなたの声が聞こえた気がしました。

あなたに会いたいです。

極楽のとんぼ私にたのみごと  
線香を忘れる小事ばかりなり

(朗読者 土田さんのコメント)

私は去年の1月、隣同士で住んでいた主人の父を亡くしました。とてもやさしい父で、私が趣味で朗読をすることをとても応援してくれていました。今回朝日新聞でこの朗読会の開催を知り、亡くなった人たちへの深い想いが込められているこの「千の風になったあなたへ贈る手紙」の作品を是非、読ませていただきたいと思い、東京から参りました。

「極楽のとんぼへ」

お子様達と支えあって、力を合わせて生きてらっしゃるということがとてもよく伝わってきて、胸が熱くなるような思いで読ませていただきました。

今を生きる喜びを感じつつ、愛しい愛する人に会いたい思い、それがとてもよく伝わってきて、ご主人様もとてもこの手紙のメッセージを受け取って喜んでいらっしゃるのではないかと思います。

## 千の風シンポジウム



「千の風物語」では、スペシャルゲストの新井 満さん、一色 清さんに加え、総合司会 (株)FM 愛媛 高橋 真実子さん、西条市教育委員長 年森 恭子さん、西条市図書館統括館長 山路 健さんをお迎えして、「千の風になったあなたへ贈る手紙」をテーマとしたシンポジウムが行われました。

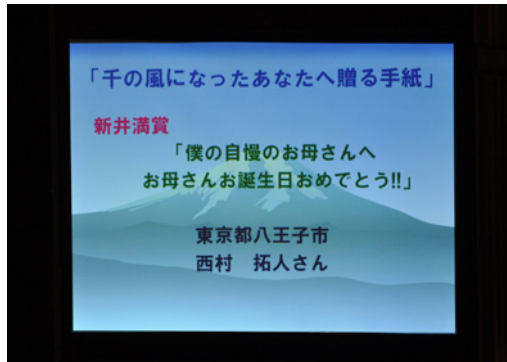
シンポジウムでは、亡くなった人を回想し、その人と対話し、その人を再び愛し、その絆を再生するというきっかけを作ったこの手紙の果たした役割について、意見が交換された他、悲しみを乗り越えた人々の力強さに、多くの方が勇気をいただくきっかけとなったこと等が紹介されました。

～「千の風になったあなたへ贈る手紙」新井満賞～

新井 満 さん 朗読

「僕の自慢のお母さんへ

お母さん 誕生日おめでとう!!」



有り余りの紙でごめんね。

お母さん、56歳の誕生日おめでとう。ぼくはあいかわらずお父さんにしごかれてるよ。もうお母さんが死んじゃってから、より一層お父さんがぼくに厳しくなって大変だよ。

まあ、お母さんのせいじゃないんだけどね。本当に時々、お母さんが突然ぼくの記憶の中に入りこんで もう、そのたんびに、涙が出ちゃって大変なんだよ!! 本当にお母さんが死んで二年もたつけど、まだお母さんが死んだっていう実感がわからないんだよね。いい思い出をありがとう。

ぼくも一生懸命に生きてるからあんまり心配しないでいいよ。まあ、まだ頼りないからちょっとは見守ってほしいけどね。5月なのにこの暑さ。もう日本は大変だよ。そっちはどう?そっちの生活を時々夢で紹介してくれたらうれしいな。他にもぼくが悪いことしてたら遠慮なくビシビシ怒ってね。

真実は中学生になって、ちょっとお父さんに反抗してるけど、やっぱりお母さんの血筋かな？とても優しい子に育ってるよ。まあ、すごく生意気だけどね。

家ではあまり弾いてないけど、バイオリンはお母さんの言う通りやってるよ。なんか前より下手になってるような気がするけど。天国までバイオリンが届いてくれたらすごくうれしいな。

今日は雲ひとつないすごくいい天気、お母さんが空から見守ってるのかな？ケーキとかないけど、本当に誕生日おめでとう！！  
最後にお母さんと歌った曲を書くよ。お母さんもできれば天国で歌ってね。まあ覚えてる範囲だけどね。

### 「翼をください」♪

いま私の願いごとが かなうならば 翼がほしい  
この背中に 鳥のように 白い翼つけて下さい  
この大空に 翼をひろげ 飛んで行きたいよ  
悲しみのない 自由な空へ 翼はためかせ 行きたい  
いま富とか名誉ならば いらないけど 翼がほしい  
子供の時 夢見たこと 今も同じ 夢に見ている  
この大空に 翼をひろげ 飛んで行きたいよ  
悲しみのない 自由な空へ 翼はためかせ 行きたい

お母さん、誕生日おめでとう！！ by 拓人

### 《サプライズゲスト》



「僕の自慢のお母さんへ お母さんお誕生日おめでとう!!」作者の西村 拓人さんとお父さんの西村 義幸さんにご登壇いただき、新井 満さんと対談の中で手紙についての想いを語っていただきました。

この作品は、実際には拓人さんがお母さんの誕生日の日にお母さんのお墓の前で書き、お墓にそえられていたこと、そしてそれを同じくその日に後で墓参りに来た父親の義幸さんが見つけ、大切に持ち帰って保管していたこと、そして、その手紙を息子に内緒でこの手紙募集に応募したこと等々、笑い感動を交えた素敵なエピソードが紹介されました。

## 新井満さん Special Live

### 《新井 満さん スペシャルライブ》



テノール歌手 秋川 雅史さんが歌い全国的にヒットした「千の風になって」と、名曲「このまちで」を披露していただき、会場は美しい歌声に包まれました。



## フィナーレ ～「千の風になって」合唱～

### 《「千の風になって」 合唱》



4時間にも及ぶプログラムとなりましたが、ほとんどの方が最後までご覧になり、フィナーレでは、声楽家 秋川 暢宏さんの指揮により、「千の風になって」を合唱して、「千の風物語」は盛大に幕をとじました。

### 《来場者から寄せられたご意見ご感想（一部抜粋）》

- ・ たくさんの人と、涙して、そういう時間を持てたことが幸せでした。（70代以上・男性）
- ・ 清々しい涙を流しました。（新居浜市／60代・女性）
- ・ 心に残る朗読会でした。新しい気持ちを持って前向きに生きていこうと思いました。また、妻との2人の普通の生活が一番大切なことだと思いました。（新居浜市／60代・男性）

- ・ 素晴らしい企画でした。西条市の水のような、「美しい心の人づくり」だと思いました。(市内／70代以上・女性)
- ・ 生きることは素晴らしいこと、痛感しました。(市内／70代以上・女性)
- ・ 人は独りで生きているのではなく、みんなに支えられて生きていることをあらためて実感しました。妻への感謝、親への感謝、周りの人への感謝を忘れず生きていきたいと思います。(市内／40代・男性)
- ・ 胸を打つ素晴らしい企画でした。身体全部で聞きました(市内／70代以上・女性)
- ・ 人生に良い1ページができました。感謝いたします。ありがとうございました。(市内／70代以上・女性)
- ・ 今回、賞を受けられなかった人の手紙も、時々朗読会を開き、全員の「千の風」を紹介してください。(滋賀県／50代・男性)
- ・ 悲しみだけではなく、心温まる作品ばかりでした。来て良かったです。(市内／20代・女性)
- ・ 飾りのない手紙の数々に、とても上手な朗読、感動しました。(市内／70代・男性)
- ・ 心の中に深くしみこみ、忘れることなく、感動を今回は参加できなかった方たちに伝えたく思います。このようなシンポジウムは初めてです。ありがとうございます。(市内／70代以上・女性)
- ・ 自分の大切な人を、今まで以上に大切にしていきます。たくさん受け入れて悔いの少ない人生にしたいなあ。亡くなった人からも支えられて生きているということをあらためて感じました。(市内／30代・女性)
- ・ 自分の家族、友人、近所(地域)として、同じ時間、同じ空間を共有してくれる全ての人に対して、「今」心からの感謝と、心からの真心で後悔することなく精一杯接していくことが大切なのだと気づかされま

した。(新居浜市／30代・女性)

- ・ 事前に本を購入して全作品、涙を流しながら読みました。今日参加して、なお一層に書いた方の想いが深く深く伝わり、感動しました。心洗われる、自分を深く見つめなおせる、最高の朗読会・シンポジウムでした。(新居浜市／70代以上・女性)
- ・ 日々忙しく忘れていた事があったように思います。今日をきっかけに日々の生き方が変わっていくように思います。大変よかったですと思います。家族を大事にしたい。(市内／60代・女性)
- ・ 素敵な心打たれる内容、また朗読をする方の素晴らしさに心打たれました。(市内／60代・女性)
- ・ 死は必ずくるが、生きる幸せが続くことを願いながらまた明日から自分らしく生きていこうと心に誓いました。(新居浜市／60代・女性)
- ・ ぬるま湯につかっているのがちという事を痛感しました。命、生きる等真剣に考えたいと思いました。(市内／50代・女性)
- ・ とてもよかったです。久しぶりに胸が一杯になりました。パートナーをより大切にしないと！！(松山市／60代・女性)
- ・ 人間として本当に汚れや飾り気のない一文一文に心が打たれて涙がしみりと・・・久しぶりにこんな気分になりました。(市内／70代以上・女性)
- ・ 生きているありがたさを感じました。“このまちで”本当によかったです。新井さんありがとう！！(市内／20代・女性)
- ・ 「亡くなった方への思い」がたくさんつまった本日のイベントにどのように向き合って客席に座ったらよいか正直戸惑っていました。しかし、とてもあたたかい雰囲気、共に偲んでいく、なつかしみ、支えあっていく、そんな感じがしました。優しい風をありがとう。(市内／40代・女性)
- ・ 歌のプレゼントをありがとうございました。夫と一緒に来ましたが、帰

りは手をつないで帰ります。(市内／50代・女性)

- ・今回の手紙を聞き、悲しみから立ち直る前向きな生き方をしなくては。と思いました。(市内／60代・女性)
- ・千の風シンポジウム素晴らしい。今日は人生で徳をしたと思う。又の機会を楽しみに頑張ります。今日は本当にありがとうございました。(新居浜市／70代以上・男性)
- ・自分も身内の死に直面した経験をもっているのです、まるで自分のことのように涙しつづけました。「あなたの分まで生きて」と改めて誓った、いい時間になりました。ありがとうございました。(市内／40代・女性)
- ・私も手紙を書いた一人として大変興味深く聞かせていただきました。みなさん大切な人を亡くしても元気に明るく生きていらっしゃる姿に勇気もらいました。何気ない日常を大切に、そして、感謝しながら生きていかなければと思いました。ありがとうございました。(松前町／40代・女性)
- ・どの手紙も深い思いが詰まっていて感動しました。死んでしまって思いを果たせなかった人がいると思うと、今の私の生活はとても幸せなんだと感じ、もっと自分の思いを大切にいきめずに生きていきたいなと思いました。(市内／20代・女性)